

国語教育 219

☆ 東京都小学校国語教育研究会・機関誌 2021. 7

豊かな言語生活に生きる確かな学びを目指して

会長 風澤 明子

昨年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止を最優先にしながらも「研究を止めない」を合い言葉に都小国研の研究を進めてきた。例年二月に開催される研究大会も研究紀要をもつての発表となったが、各研究部は多くの制約の中、各研究主題を基に工夫して進めた研究成果を示すことができた。本来であれば、日々の学習や生活の中で創り上げてきた教師と子供たちとの教室の世界を感じながらの授業であるが、それは叶わず、子供の直接的な姿を通じた研究が実現することを願う一年ともなった。

さて、本会の令和三年度の研究は、昨年度のリモート等を活用した研究方法を生かしながら、さらに積極的に多様な方法を探り、研究を深めていく。研究主題は平成二十七年からの「未来を拓く国語教育の創造」を継続し、副主題を昨年度に引き続き「評価活動の充実を通して、学びの質を高める単元づくり」と設定した。

本年一月、中央教育審議会は「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現」の答申をまとめた。その内容からは学習指導要領の着実な実施を軸に、指導の個別化、学習の個性化と協働的な学びの充実を学習者の「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた教師の授業改善につなげることに捉えることができる。これは、本会研究副主題の「学びの質を高める」にもつながる。具体的な学習活動においては、GIGAスクール構想の実現での新たなICTの効果的な活用も学びの方法を広げるものとして期待がされている。

ところで、今年度の研究の目指すところは「学びの質を高める」であり、そのための単元の明確な目標設定と目標に到達するための適切な言語活動を設定した単元づくりが必要となる。学びの主語は子供であり、一人一人の子供が「何ができるようになるか」「何を学ぶか」「どのように学ぶか」といった資質・能力ベースでの学習の見通しをもち、ゴールを明確にしていくことが重要である。また、教師が明確な指導のねらいはもちつつも子供の学習経験や思いを生かした学びの計画を子供と共に立てていくことが、子供が主体的に学び、学びの質を自ら振り返り、調整しながら粘り強く学びの質を高めていくことにつながる。評価は「指導と評価の一体化」の視点でこれまでも研究を重ね指導の改善につなげてきている。今年度は、さらに、子供が自分の学びをメタ認知し、学びの質を高めるために単元などの場面、どのような方法で評価し、どのように生かすのかにも焦点を当てた研究となる。子供の具体的な姿を思い描ける研究でありたい。

今年度の研究成果は、第三十二回東京都小学校国語教育研究会研究大会として報告する予定である。感染予防に努めながら、今年度のゴールを目指し、研究の充実が一層図られるよう歩みを進めていく。

(葛飾区立南綾瀬小学校)

令和二年度

研究活動報告

事務局次長 小宮 孝之

研究主題

「未来を拓く国語教育の創造」
―評価活動の充実を通して、
学びの質を高める単元づくり―

一 研究大会事業

新型コロナウイルス感染症予防対策のため、7月末日までの全ての活動・会合は中止

(一) 総会・講演会・研究委員総会
5月14日(木) 誌面開催

(墨田区立両国小学校)

会則第14条「総会の議を経なくとも決定することができる」を行使し、総会成立。書面での提案・承認の形をとる。

・会長以下新役員承認

・活動計画、研究事業計画

(二) 多摩地区総会研究大会

5月28日(木) 誌上发表

(青梅市立第二小学校)

(三) 講演会 中止

(四) まなび塾 中止

(五) 第31回研究大会 誌上发表

(文京区立千駄木小学校)

二 研究調査事業

【話すこと・聞くこと部】

「主体的に話し合い、自己充実を目指す児童の育成
―学びを積み重ねる指導と評価の工夫―」

・8月24日 研究組織、年間計画、研究概要の検討

講師 都小国研顧問 邑上裕子先生
・11月9日 ミニ単元集分科会報告、検討

講師 都小国研顧問 邑上裕子先生
・11月24日 指導のポイント集
作成分科会からの報告、検討

・3月29日 成果と課題について
講師 都小国研顧問 邑上裕子先生

【書くこと部】

「児童の深い学びを目指す、主体的・対話的な書くことの単元づくり」
Z O M等のリモートを活用し、研究授業については中継動画、VTRの視聴等とした。

・11月6日(金) 第4学年
渋谷区立富谷小学校
(授業者) 佐藤綾花指導教諭

(単元名) 「世界にはこる、渋谷・富ヶ谷のみ力」→理由や例を挙げ

て、紹介文で伝えよう
・11月24日(火) 第2学年
足立区立弥生小学校

(授業者) 山口瞳教諭
(単元名) 「教えるよ！おもちゃの楽しい遊び方」順序に気を付けて遊びを紹介する文章を書く」

・11月27日(金) 第5学年
町田市立鶴川第二小学校
(授業者) 市川裕佳子指導教諭

(単元名) 「あなたはどうか考える」
読む人が納得するような理由や根拠を挙げて意見文を書こう」

・12月1日(火) 実践報告会
中野区立令和小学校体育館
【年間講師】
都小国研顧問 成家巨宏先生

講師 都小国研顧問 岸本修二先生

・10月下旬～11月下旬
第2期 授業実践・検証

・12月1日(火)
第4回運営委員会

第2期実践・検証について
講師 都小国研顧問 岸本修二先生

【言語部】

「言葉のよさに気付き、親しみ、日常生活に生かす単元づくりと評価の工夫」

・10月23日 江東区立豊洲北小学校
主任教諭 木原小百合

講師 都小国研顧問 今村久二先生
第1学年「あつまれ！みんなのことばカード」

・11月9日 杉並区立八成小学校
主任教諭 岡崎 智子

講師 都小国研顧問 今村久二先生
第6学年「続★言葉大研究」HNS感覚のちがいにせまる」

三 研究成果刊行事業

・機関誌「国語教育」第二二七号
二一八号

・多摩地区研究会会報「国語教育」
第一〇五号・第一〇六号

・第三一回研究大会研究紀要
第四二号

第3回運営委員会 第1期実践・検証について

令和三年度研究主題・副主題

研究主題

未来を拓く

国語教育の創造

副主題

～評価活動の充実を通して、
学びの質を高める単元づくり～

副会長 加賀田 真理

一 研究主題の設定

平成二十九年に告示された学習指導要領が、昨年度より全面实施となった。国語科で育成を目指す資質・能力が「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱で整理され、評価の観点も三観点となった。教科横断的なカリキュラム・マネジメントの確立も明記され、これまで以上に国語科で育成すべき資質・能力を明確にした実践を推進していく必要がある。

また、新型コロナウイルス感染症の流行に伴い、GIGAスクール構想に基づく一人一台端末の整備が急速に進み、中央教育審議会では「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～すべての子供た

ちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現（答申）が示された。改めて児童一人一人に「学ぶ力」を育むことが求められている。

本会では、平成二十七年から、研究主題を「未来を拓く国語教育の創造」と設定し、研究に取り組んでいる。

「未来を拓く」とは、国語科において児童が主体的・協働的な言語活動を通して豊かな言葉の力身に付け、さらに他教科の学習や今後の日常生活に生かしていくなど、将来を見据えた豊かな言語生活者を育成することである。

研究副主題は、昨年度より「評価活動の充実を通して、学びの質を高める単元づくり」として研究を進めている。「どのような力身に付いたか」について教師と共に児童自身が自覚し、自らの学習を調整しようとする態度等の伸長を図ることで評価活動を充実させる。また、学習評価を学習改善や指導改善につなげ常に更新すること、学びの質を高める単元づくりを実現していく。そのことにより研究主題の具現化を図る。

二 研究主題に迫る観点

今年度の研究を進めるに当たっては、次の観点について、各部の領域の特性に応じて具体的に内容を設定し、研究を深めていく。

(一) 学習の充実及び質の向上を図る単元づくり

○ 子供の実態に応じた、学びの必然性がある指導の充実

○ 豊かな語彙の拡充につながる指導の工夫

○ 学習の成果物等の活用・共有を図ることによる、学びを積み重ねる指導の工夫

(二) 学習改善・授業改善につながる評価活動の充実

○ 評価規準、評価方法の明確化

○ 教師・児童・保護者との間での評価の共有

○ 児童の学習状況の把握の仕方の工夫

○ 指導過程に応じた評価や長期的な視点での評価の工夫

○ 次の学習に生かす評価やつながりを意識した評価の工夫

○ 児童が、自らの学びを振り返り、調整できる学習過程の工夫

○ 児童が学びの変容を自覚できる自己評価、相互評価の工夫

(三) 国語科及び他教科・他校種と

の連携による学習活動の活性化

○ 「社会に開かれた教育課程」や「教育課程全体の中での国語科の役割」について自覚し、国語科で育てた力が他教科等でどのように生かされるのかなど、活用を意識した実践の充実

○ 幼保小連携、小中一貫教育を視野に入れ、小学校以前・小学校以降も含めた系統性を重視した指導の推進

○ 特別支援教育の実践との連携を図った言葉の教育としての拡充・深化

三 研究の進め方

研究組織は「言語部」「話すこと・聞くこと部」「書くこと部」「読むこと部」の四つの研究部にて研究を進める。

各部分は、研究主題を踏まえて、部ごとの研究主題を設定し、小研究の研究授業を通して研究を積み重ね、その成果を令和四年二月に実施する研究大会で発表する。

各研究部の特性を生かし、相互の関連を図った横断的な研究についての方策を講ずる。ICT機器についても積極的に活用を図る。

令和三年度

都小国研 事業計画

令和三年度研究活動の進め方

未来を拓く

国語教育の創造

「評価活動の充実を通して、

学びの質を高める単元づくり」

副会長 加賀田 真理

一 研究活動の基本方針

(一) 「国語教育の理論と実践について研究し、東京都小学校国語教育の推進と発展に寄与することを目的とする」研究活動を会全体で協力して積極的に進めていく。

(二) 直接集まって話し合う等の研究活動は制限を受けている状況であるが、オンライン会議や、メール、ホームページ等の活用など、会員相互の工夫により研究が活性化するように努力する。

(三) 各地域の実態に配慮しながら、ICT機器を有効に活用した学習活動についても提案する。

(四) 年度途中でも年間指導計画の変更が行われる場合がある。小研会場校や研究大会会場校の状況、

会員の所属する学校の実態に十分な配慮をして研究を進める。各区の教育委員会の方針等を確認し、その範囲内で研究活動を行う。

(五) 参集を伴わない研究活動は、様々な事情のある教員も参加しやすい研究環境である。ICT機器を活用し、会の発展・拡大を図り、研究活動の活性化を図る。

二 研究大会事業

(一) 総会・講演会・研究委員総会

【書面開催】

講演 文部科学省教科調査官

大塚健太郎先生

令和三年五月十三日(木)

葛飾区立南綾瀬小学校

※動画は都小国研ホームページにて会員限定公開

(二) 多摩地区総会・研究大会

【書面開催】

(三) 第三十二回研究大会

令和四年二月十八日(金)

文京区立千駄木小学校

三 研究調査事業

(一) まなび塾

令和三年七月十七日(土)

【オンライン開催】

文京区立千駄木小学校

令和三年十月二十三日(土)

府中市立府中第二小学校

(二) 各研究部の定例研究会

各部を超えて公開する研究授業「小研」「大会」に対して「小研」と称する)を実施する。

(三) 各研究部の研究活動

- ① 研究主題・副主題を踏まえて各部の主題を設定し、授業研究により研究主題を追究する。
- ② 各支部への研究活動を積極的に支援するための連携を深めていく。
- ③ 各研究部は、大会をはじめ、小研、機関誌、研究紀要等に研究成果を発表する。

(四) 各支部の研究活動への協力

各研究部、顧問・参与は、各支部の国語科教育の充実に資する支援を積極的に行う。

四 研究成果報告事業

(一) 機関誌「国語教育」

二一九号、二二〇号の発行

多摩地区会報「国語教育」

一〇七号、一〇八号、一〇九号の発行

(二) 研究紀要

第四十三号(令和四年二月十八日 第三十二回研究大会研究紀要)の発行

都小国研との

出会い

顧問 平林 久美子

関西の大学で、カウンセリಂಗや児童福祉を中心に学び、教員免許は取得しませんでした。関心があったのは学校に行けない子供や家族と暮らせない子供たち。学校を外からやや批判的に眺めていました。大学を卒業して就職した山間部の児童養護施設で、子供たちの負の連鎖を断ち切るには「学力」だと実感し、改めて教師を目指しました。

初任校の最寄り駅は代々木。まだ国鉄だった頃、改札口では、駅員さんが改札錠の音のリズムや爪の伸ばし方で個性を主張していました。

その学校で、校内研究の講師であった津田成一先生と出会い、御指導いただきました。そして、津田先生から、音声言語の研究で精力的に実践を重ねていらした邑上裕子先生を紹介され、研究報告書を送っていただきました。本会の「聞く・話す部」に入れていただいたのは、平成五年度からだと思えます。

当時の国語科学習指導要領は、「A表現」「B理解」でした。「話す」

は「A表現」のAとイ、「聞く」は「B理解」のAとイ。対話の「言葉を受けて返す」機能はその両方を跨いでいます。都小国研「聞く・話す部」の先輩方は、対話の機能を分析し、指導事項の系統表を細かく作成していました。研究が「話し合い」に発展しても、その表が礎

になっていました。当時の「聞く・話す部」は、少人数で、喫茶店で分科会ができるくらいの規模でした。大きな転換期を迎えたのが、平成十一年度です。学習指導要領に領域「A話すこと・聞くこと」が加わり、国語科のキーワードが「伝え合う力」であったことから、一気に関心が高まり、研究部員が急増し、全体世話人として戸惑った記憶があります。

平成十四年度から平成二十二年まで、指導主事と副校長の時には、研究に参加できませんでしたが、再び、「言語部」と「話すこと・聞くこと部」に関わり、まさかの研究大会会場や会長職を仰せつかり、今年の三月に定年退職を迎えました。

御指導いただき、お世話になった御恩返しは、まだ何もできておりません。生涯能動的に学び続ける人間

であり続けることで、これから少しずつ御恩返しをしてまいります。

コロナ禍の 学校で

参与 前田 佐和子

再任用校長となってから、すでに三年目を迎えました。まさに激動の三年間、平成から令和に変わった元年度の3月に突然始まった臨時休校は、年度をまたぎ、三か月も続きました。

子供たちのために学校は何をすべきか、そして今何ができるか、そもそも学校が社会の中で果たすべき役割は何なのか：突きつけられた問いは大きく重く、一校を預かる校長として、この間、考え続けてきた感がいたします。

「学校は、人が育つところ」

子どもたちに人間らしくたくましく生き抜いていく力の基礎を身に付けさせることが、私たち小学校の責務です。受け身の姿勢で教え込まれた知識だけでは変化の激しい時代に突きつけられた課題を解決することは到底できません。

現状を分析し、解決すべき問題は何か、課題解決のためには

どうすればよいのか、よりよく解決することはできないか等、自身で主体的に立ち向かっていく姿勢が求められると考えます。

杉並区教育課題研究指定校として、在籍校が目指しているのは、教師の発問で誘導される一斉一律の授業ではなく、個別多様な一人一人を学習の主体者として、その子自身の問いを大切にしたい授業です。個の多様性を生かし、一人一人が主体的に自らの課題を他者と協働して探究する学びへと転換を図ることが目指す学びの姿です。

これは、学習指導要領にある各教科の目指す資質・能力を育むための主体的・対話的で深い学びの実現に他ならず、私が教諭時代に都小国研「聞く・話す部」で、かけがえのない研究仲間と追究してきた命題に他なりません。あの頃、都小国研で尊敬できる素晴らしい方々との出会いがありました。多くの先輩先生方から温かいご指導をいただき、教職人生の礎を築くことができたことは私にとって、人生の宝です。深く感謝するとともに、今、与えられたこの場所で課題解決に全力を尽くすことが私の使命と考えています。

変わりゆく 教育活動？

参与 大畑 賢一

今年度から本格的に運用が始まったGIGA (Global and Innovation Gateway for All) スクール構想における教育活動。本北区でも児童に四月よりクロームブックを配布、その運用・推進に努めているところです。コロナ禍にあつて、一気に促進。なんとも皮肉な感は否めませんが、教師も子供も日々使いながら、活用度を上げているところです。

過日、東京都教育施策連絡会でのGIGAスクール構想におけるICT活用の話。講師の先生が、単にICT機器を導入して、プログラミングをやれば良いということではなく、どうして、今、何のためにICTが必要なのか、ということを講義してくださいました。今後日本人の人口は、二千年には今の半分以下になるとも言われています。人がいないのだから外から人がどんどん入ってくるでしょうし、AIを活用したロボットや機器が台頭してくるのは目に

見えています。数年前には今後残る職業と消え去る職業の話題もありました。そうした状況下には、英語や中国語は共通語になっていくかもしれません。それと同様、ICT技術がわからなくて、あなたの仕事は大丈夫ですか。時代に合わせて対応できる力を付けていかないと、貧しい日本人になってしまいますよ、というシグナル発信。そうならないためにもICT技術を身に付け、その活用に子供も教師もともに歩みたいと思います。とはいえ、一人一台端末は、あくまでも文具としての扱いといわれるように、使い勝手を良くしていく試みをしていくことはあってもそれに振り回されないように気を付けることも肝要でしょう。

国語科教育を実践する私たち教師が、発達段階に応じて目の前の子供たちに、どのような力を培わせることができるか、今後の国語教育を充実させるうえでの大きな鍵となるでしょう。多くの読書体験を積むことで、情緒力・想像力・論理的思考力・語彙力の総合的な発達を促すべく、子供の成長に携わりたいものです。

学び合って、高め合う

参与 和田 京子

三十代半ば、異動先での校長先生と熱心に国語の研究をされていた先輩の先生との出会いが、国語の研究に仲間入りさせていただいたきっかけとなりました。国語を専門とされていらつしやるその校長先生に、異動早々に国語の授業を観ていただきました。校長先生からのご指導は、「もっと勉強しなければいかな。」と厳しいひと言でした。情けなく恥ずかしい思いをしたことを思い出します。その後、私は、その校長先生のひと言に奮起し、腰を入れて国語を学ぶことにしたのです。そして、都小国研への参加を導いてくださったのは、やはり当時出会った先輩の先生でした。

都小国研では、さらに多くの皆様との出会いがあり、皆様の国語教育への情熱と、研修や研究への意欲に影響を受けて、多くのことを学ばせていただきました。子供たちが豊かな言葉の力を身に付けることを願い、目的を共にして忌憚なく考えを出し合い、学び合う

ことができた都小国研でした。そのことを思うと、改めて出会った皆様に感謝の思いです。と同時に、コロナ禍では、皆様が集まって研究を行うことはなかなか難しいと思います。が、今後も都小国研が、先生方一人一人の指導力を高めるより良い学び合いの場であり続けることを願っています。

現在、再任用校長として勤務しています。コロナの現状から、まだまだ様々な制約が続く中での教育活動です。その中で、子供一人一台のタブレット端末が導入されました。デジタル教科書も入りました。それらを活用して、学習活動のより一層の充実を図り、学習指導要領が目指している「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善が求められています。

本校の教員も、互いに学び合いながら試行錯誤を繰り返しています。子供たち一人一人の資質・能力をより効果的に育成するためのタブレット端末の活用というねらいを教員としっかりと共有して、私も、慣れない手つきでタブレット端末を操作しながら教員と共に、「新たな学びの創造」にチャレンジしているところです。

編集後記

昨年度、東京都小学校国語教育研究会ではコロナ禍の中にあっても、研究の灯を消さず、研究を進めることができました。今年度も、総会において、引き続き研究主題「未来を拓く国語教育の創造」評価活動の充実を通して、学びの質を高める単元づくり」を目指し、国語教育に邁進することを確認いたしました。

「主体的・対話的で深い学び」の実現や「学びの質を高める」ために、児童が自らの学びを振り返り、自覚し、調整する態度を身に付けていくことが必要になります。児童が自分の学びを振り返り、評価し自覚するために、どのような取り組みや工夫ができるかが問われます。一人一人に児童の学びがより豊かに次の学びにつながっていくようお願い、皆さんと力を合わせて研究に取り組みたいと思います。結びに、お忙しい中、玉稿をお寄せくださった顧問・参与の先生方に心より感謝申し上げます。新宿区立落合第二小学校

橋本 則子